

巻頭言

2008.7月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

劔岳 点の記

茗溪塾塾長 宇野雅春

劔岳は、私にとって生涯忘れがたい山です。今から20年以上も前の夏、劔岳に登りました。8月のお盆休みを、兄に誘われるまま5日間ひたすら山に登ったのですが、その3年後に兄が病気で他界してしまいました。そして劔岳が私と兄との最後の「思い出」になってしまったというのが、忘れがたい理由のひとつです。その時の劔岳は、全く雨の降らない晴天続きの5日間で、昼は高山植物の溢れるような花々を、夜は、ロッジの屋上から見渡せる満天の星を、といった具合で、スケールの大きさという点でも、また、危険な場所の連続と眺望の素晴らしさでも、全てが、一生に一度しか体験できないと思える「山歩き」でした。「合格への道しるべ」の中にそのときの事が書いてあります。最後にばててしまった私と、兄とのトラブルの顛末です。ばてた私が兄とともにたどり着いた所は仙人池の山小屋で、最近、久しぶりに買った山の雑誌に、その女将さんが80歳を超えてなお元気でやっているという記事と写真がありました。20数年前、ばててとても食事が取れないという私のために、お粥を作ってくれたその人だと写真を見てすぐ判りました。

こないきさつもあって、最近書店で見かけた新田次郎の「劔岳 点の記」を興味深く読みました。明治40年が舞台なのですが、何しろ、そのころまで劔岳は未だ人が登ったことのない山、あるいは登ることのできない魔の山、針の山と信じられていました。

劔岳の山頂に三等三角点を設置するというのが柴崎芳太郎をリーダーとする陸軍の陸地測量部の目的でしたが、何しろどこから登ってよいかわからない未踏の山です。間違えば死に直面することもあります。柴崎の他にメンバーの生田と木山、そして案内人の長次郎と鶴次郎、この五人が幾多の困難を乗り越えて初登頂に挑戦します。滑落等の危険だけでなく、悪天候に遭遇すれば、あっという間に遭難という現実にもさらされます。そこではリーダーの冷静な判断と、一人一人の能力が最大限に発揮されなくてはなりません。小説では、メンバー一人一人がそれぞれの事情を持ちながら、誰も登ったことのない危険な山に挑戦するというところに戸惑いを持っていました。自らの「登る!」という決意にいたるくだりは、彼らの仕事への誠実さや人間としての潔さを思わせます。そんな部下に対して思いやりを持ちながらも、あくまでも山頂に三角点を設置するという任務遂行のために、黙々と努力と準備を重ねていく柴崎の厳しさが、際だったリーダーシップを感じさせます。

実に2年がかりの仕事です。長次郎という才能のある案内人がその間、柴崎と行動をともにしていきます。彼の勘に大いに助けられながらついに劔岳の登頂に成功します。この命を懸けた登頂は、陸軍幹部の冷遇により殆ど無視されてしまうのですが、山岳の歴史にはきちんと語り継がれていきます。小説は登頂で終わるのではなく、その後も天候に振り回されながら、困難を極める測量を完全にやりとげていく様子をさらに描いています。最後に「君たちのお陰で無事に仕事は終わった。ありがとう、本当にありがとう」と柴崎は、メンバー全員に頭を下げます。安い賃金で、過酷な労働をする案内人達も、限られた予算の中で任務を全うしなければならない測量官達も、ともに大変であり、ともに辛いが故に思いやりが生まれる、ということなのだと思えます。劔岳の壮大な風景とともに歴史に残る一歩がそこにはあります。

一つの未踏の山に登るのにどれだけの人の協力というものが必要なのでしょうか。仕事も受験も「山に登る」事によくたとえられます。リーダーにはリーダーとしての計画性と責任感と判断力が要求されます。そして、メンバーの一人一人が本当に自分の持っている力を余すところなく発揮する時、相乗効果が生まれます。「劔岳 点の記」はチームワークと相乗効果の物語です。勝手な解釈とは思いますが、私たちが仕事に求めているものは本当はこんなチームワークなのではないでしょうか。仕事をする喜びも、勉強する喜びも多分ここにあるはずです。どの山に登れるのかも、どんなチームが組めるのかにかかっているような気がします。そんな気持ちで「夏」を準備しています。